

「不幸にならないための性教育から 幸せに生きるための性教育へ」

第1回 性教育の前に横たわる、性に対する否定感

元高校教師、性教育研究者、『おうち性教育はじめます』共著者
村瀬 幸浩

性教育をすすめることに對し、これを抑制する言葉に“寝た子を起こすな”という耳慣れた表現がある。元々は“Let sleeping dogs lie”というもので“寝ている犬を起こすと面倒なことになるので余計なことをやめて寝かせておけ”ということらしいが、わが国では性教育関連以外で使われることはないように思う。つまり“子どもが性について知ると良くないことをする”という前提で使われてきており、この言葉には性に対する否定感と子どもへの不信感が横たわっていると考えるとよいだろう。

こうした考え方からは積極的で明るい幸せへの学びは生まれにくいし、わが国では育てられてこなかった。

●性や性器をどのように理解するか

今でこそほとんど見かけなくなったが、しばらく前まで多くの学校の女子トイレには「汚物入れ」が置いてあった。「使い終わった生理用品入れ」で、その通り書けばいいものをわざわざ「汚物」と表示していたのである。また、多くの家庭では月経中の女子は風呂に入らせないとか、入るとしても皆が入った後の「終い湯」に、としつけた。月経を不浄なものとしていたのである。長く続くこうした慣習を通して、性や性器に対する不浄観・不潔観が醸成されていったのである。そして、そのことを通して女子の性や性器への偏見や差別意識が育てられたといえよう。女子ほどに鋭くつきつけられなかったにせよ、男子の性についても、例えば精液を膿のように言ったり、「精液で汚れたパンツ」などと当たり前のよう表現してきたのではないだろうか。

こうして子どもたちは、自らの成長に伴う性的な現象をポジティブに受け止められないまま育てられてきたと言っただろう。

本来ならば、ここから月経や射精のしくみやはたらきを科学的に学び、性器官を柔らかく傷つきやすいところとして大切にやさしく扱うこと、したがってきれいな下着で保護する(いやらしいところだから下着でかくすのでなく)よう促すことが求められるはずである。性の学びのスタートになるこの課題の取りあげ方を根本的に見直す必要がある。

●人工妊娠中絶をどう扱うのか

人工妊娠中絶手術は、わが国では母体保護法によって合法的に認められている手術である。ところがこれが性教育のテーマとして取りあげられる時、生徒たちの性行動を抑制することを目的に、まるでそれが犯罪であるかのように、また手術の経験がその後の妊娠を阻害したり、精神的な後遺症につながる可能性を強調したりする傾向が依然としてあることを、大学生の高校時代の学習経験として耳にすることがしばしばあった。私はこれを“人工中絶の罪と罰の教育”などと思ったが、なぜこうしたことが起こるのか、その理由として、教育する立場の人間が陥りやすい「パターナリズム」がある。パターナリズムとは父親らしい温情主義、男性が占めてきた優位な立場の意向に、力の弱い、子どもや女性を従わせる父権主義的な考え方のことである。家父長主義ともいってよい。

子どもたちが不幸な目にあわないように脅しつけてでも従わせる＝セックスに近づかないようにする、こうした傾向は“中絶”を筆頭に性教育には散見される「道徳主義教育」の顔である。

中絶は悲しい出来事であり、誰も経験しないですればそれに越したことはない。にも拘わらず人間がすることには失敗があり、予期しない妊娠に見舞われる可能性はセックスをすれば誰にでもあり得ることなのである。そのため、長い歴史の中で女性たちを中心にした運動によってリプロダクティブヘルス&ライツ(性と生殖に関する健康と権利)が国際的に認められてきたのである。出産の間隔を決めるのは女性自身の権利であるとして。

中絶の教育は、こうした歴史を振り返りつつ予期しない妊娠をしないための教育を、とりわけ男性への教育と協力の不可欠性を強調しつつ行われなければならない。また中絶手術も女性の苦痛を減らし、より安全に行うよう進歩していることにも触れることが重要である。わが国で行われている、さまざまな器具によって子宮内の内容物を掻き出す方法は国際的には“時代おくれ”とされており、内容物を一気に吸い出す方法、さらに薬物(経口中絶薬)による対応が次第に一般化しつつあることも知らせたい(2017年現在、68ヶ国・地域に及んでいる)。

このように、人工中絶の学びを歴史的背景とともに男女両者の関係の質を問う問題として、幸せに生きるという方向性の模索の中で追求していくことが求められている。

●ピル(経口避妊薬)の学習の意味とは

中絶という悲しい体験をしないためには確実な避妊に取り組むことが不可欠なのは自明である。その避妊について、自ら妊娠することのない男性のコンドーム装着に圧倒的に頼っている現実(国際的に際立っている)をどう説明すべきだろうか。というよりも、説明するまでもなくそれが当たり前と(思わされて)きたのである。そのことはピル認可が国連加盟国で最も遅い国であり、認可された今もその使用率がきわめて低い(約2%)ことに顕著に表れている。※世界の動向としては女性が使える方法(ピルやIUD、避妊注射など)が約8割を占めているが、わが国は9割以上、男性が使うコンドーム法が圧倒的に多い。

なぜそうなのか。これを考える時 ①わが国では医師の処方によって手に入れることになっていて、薬局で自由に買い求められないばかりか価格がとて高い ②長い未承認の期間を通じてピルの副作用が強調されたために警戒心が浸透し、いまも根強く残っている ③積極的にすすめる動きが学校教育も含めて弱いままである — ピルは28日間継続して飲み続けるという持続的な努力が必要で、それを実行するには性に関する教育・理解が必要である。

つまり、幸せに生きるための学びとして積極的に取り組んでいないと言わざるを得ない。

その結果、性行動において男性が「主」、女性は「従」という関係は依然としてそのままであり、それが避妊法の選択にそのまま反映しているのではないか。

●マスターベーションをセルフプレジャーとして

マスターベーションの訳語には「手淫」「自渌」が当てられている。最近では「自慰」も使われるようになり、少し気持ちが柔らかい。しかしまだ何かうしろめたい言葉の印象がつきまとっている。私は20年ほど前から「セルフプレジャー(自体愛、自己快楽)」と言い換えているが、少しずつ賛同する人が増えていて嬉しい。

男子に対してこの性行為を否定する人はまずいないが、それでも「仕方がない」とか「必要悪」などと申し訳なきように認めている。しかし、女子に対しては「あり得ない」とか「考えたことがない」「おかしい」などと途端に雲行きが変わるのはなぜだろうか。

このことは経験率を示すデータにも表われている。例えば第8回「若者の性」白書(2017)によれば、大学生男子の自慰経験率は92.2%(性交は47%)に対し、女子は36.8%(性交は36.7%)、高校生男子の自慰78.4%(性交は13.6%)、女子は自慰19.2%(性交は19.3%)となっていて自慰経験の性差は著しい。もちろん自慰をするしないは本人の意思決定に委ねられるものであるが、この数値に表される性差は、ピル利用の問題と重なって「女子の性の主体性、快楽性」に対し、歴史的に長く続いた偏見、抑圧(女性自身の内面にも根づいた)結果ではないかと思う。

セルフプレジャーは性的欲求の自己解放、自己管理の課題と結びつけて、性別を問わず今後積極的に取りあげ取り組むべきテーマだと考える。

掲載:2021年8月31日

次回は2021年9月30日に掲載予定です。

このゼミは「フレンテみえ」ホームページで公開しています。

フレンテみえ

検索

クリック

MIE PREFECTURE GENDER EQUALITY CENTER

三重県男女共同参画センター フレンテみえ

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135

E-mail:frente@center-mie.or.jp URL:https://www.center-mie.or.jp/frente/

「不幸にならないための性教育から 幸せに生きるための性教育へ」

第2回 性教育のパラダイム転換を —その1—

元高校教師、性教育研究者、『おうち性教育はじめます』共著者
村瀬 幸浩

パラダイムとは「ある時代、ある分野における支配的な認識(ものの見方、考え方)の枠組」のことである。今回は、性教育において「当たり前」とされてきたことを改めて見直してみたい。

●性別意識や性愛の対象は決まりきったもの？

私が性教育をはじめた50年ほど前、性別は男か女のどちらかしかない当たり前のように思われていたし、まともな性行為の対象は「異性」に決まっているとされていた。そうではない人がいても一時的な現象でやがて「もどに戻る」ものとされていて、戻らない人がいたらその人は病気か、もともと変人であるように考えられていた。

50年前どころか、つい10年前、いや今現在も「常識」のようにそう考えている人も少なからずいるし、法的にいえば性的多様性を受け入れる何の変化もない。

現に学習指導要領の保健体育(中学校)では、思春期には「身体の機能の成熟とともに性衝動が生じたり異性への関心が高まったりすることなど」(傍点筆者)とあり、同性への性関心などは無視されたままである。

しかし科学は、性別というものは男と女に明確に二分されるものではなく、ひとりひとり違うというほど多様に存在することを明らかにした。また誰が誰を愛するかは二人の「人権」の問題(愛する対象を持たないア・セクシュアルの人もいる)であり、宗教その他の理由でその愛を妨げるのは人権侵害と考えられるようになった。そして婚姻についてもすでに28の国・地域が同性婚を合法化するに至っている(2019年現在)。

このように長い人類史の中で作られてきた性別二元論と異性愛絶対論は大きく揺らいできている。まさしく性と性教育の「パラダイム転換」の指標として注目しなければならない。

●性欲＝本能論を克服することから性教育は始まる

「本能」とは“動物に生まれつき備わっている能力や習性”と言われていて、食欲、睡眠欲、性欲が挙げられている。なぜ性欲が本能かという、それがないと種族維持ができないからとされてきた。しかし今日、人間誰も種族維持のために性を営むものだと思っただけではない。元々性欲を持たない人も、同性との性愛で生きる人も、妊娠を希望しない人も、希望しても叶わない人もいて、それこそ決まりきった生殖本能などと無縁な生き方をしているのである。にもかかわらず、性欲＝本能という考え方は人々の意識の中に隠然と生きていると思う。

そうした意味から、私は、性についていえば人間の意思や感情を超える印象の強い「性欲」という表現ではなく「性的欲求」と言い換えて、その内容をより豊かに幅広くとらえ直したいと考えてきた。

身体的精神的に快楽を得たいし分かち合いたい願望、自らの性的アイデンティティを肯定し「対」にとらわれず自己表現したい願望、予期しない妊娠を避け抑圧や暴力のない関係性のもとでともに生きたいという願い等々、そうした長い人間の歩みの中で、性を文化として、学習によって身につける能力として、現在および将来へ「教育」の必要性がますます求められているのではないだろうか。

性的無知、無理解は無謀な性行動をうむ。性的理解が深まるほど慎重な性行動をうむ。「慎重な」とは自己中心でなく相手のことをよく考えて、ということでもある。

性本能論から性文化論へーパラダイム転換の重要な指標といえよう。

●「母性(愛)本能」という名の縛り、息苦しさ

この言葉、もう死語かと思ったらとんでもない。時々不意に鎌首をもたげて襲ってくるのである。女性をねらって。

女性の生殖機能としての妊娠、出産、これは掛け替えのない大切な体の営みであり、性別にかかわらず正しく学ぶ価値があるテーマである。特に女子は自らそれを担う立場になる可能性があるわけで、より主体的に詳しく学ぶことが求められよう。問題はそうした機能を持つ女性に対し、産後の育児を含めて「生殖」に縛りつけ、固定的な性別役割ヘリドする考え方、施策である。しかもそれを母性愛という言葉で包みこみ、身動きさせなくしている(してきた)のではないだろうか。結婚したカップルにとって出産後の育児に関わって女性の人生だけがすっきり変わってしまうことから、「関係」のきしみが深刻になることがしばしばある。確かに妊娠・出産は女性だけにしか出来ないことであるが、その他のことは男性にも出来るし社会の力でフォローできる。またそのことで男性の人生も「労働」ばかりでなく全きもの(まったきもの)になるのである。

全きものとはなにか。働くこと、家事すること、子どもを育てること、愛すること、遊ぶこと…。そうしたことをすべてわがこととして受け止め、受け入れ、表現する暮らし、生き方のことである。

母性の名による固定的な役割分担意識がもたらす不幸、加えて関係の不幸からのパラダイム転換を追求すべき時代を迎えているといえよう。

●出産の20%以上は帝王切開なのに

性教育で取り上げられるテーマで「出産」は昔からの定番である。いのちの素晴らしさ、出産時の母親の頑張りと、元気な産ぶ声、家族みんなの笑顔等々、感動的な物語は授業参観でもしばしば取り上げられてきた。その時の出産はすべて経膣分娩である(普通分娩といわれる)。ところが実際には初産年齢が高齢化してきたり、妊娠の体力への懸念、出産時のトラブル回避等の理由で帝王切開(異常分娩といわれる)が増え続けている※ という。ということは今の生徒の中にすでに、またその生徒たちの今後の人生の中で、帝王切開による出産は例外どころか一つの選択肢となる可能性が高い。

ところが現実には、帝王切開に至ったのは「我慢が足りなかったから」とか「わが子への愛情不足(ここにも母性(愛)の歪んだ影響が残っている)」とか、生まれた子どもの何らかの弱点をみつけて出産方法のせいにするなど非難中傷したり、それをまともに受けとめて心を病んだりすることが後を絶たないという。

かつて私も性の講義の中で「出産」を大切な教材として取り上げてきた。その時には、胎児のもつ、自ら生まれ出るためのしくみとか、それを支える母体の働き、それらの共同作業としての「出産の科学」を語ってきた。極力出産をめぐる感動物語にならないよう配慮してきた。いろいろな夫婦(ばかりでなく)があり、家族があり、事情があるのだからと。しかしまだその頃は経膣分娩しなかった女性の苦汁には十分思い至らなかったと反省する。

「普通分娩」は「経膣分娩」に、「異常分娩」は「切開分娩」に表現を変え、学校教育においても現実に即して冷静に取り上げることが必要である。これもまた、パラダイム転換と言ってよいだろう。

※2017年の厚労省データでは20.4%とされている。

●性感染症について思い込みを捨てて正面から見つめ、学び、対応する力を持つ

性感染症(STI※)もいろいろある病気の一つである。しかしこれが性行為によって感染するため、感染を恥じる、卑しむ心に支配されて、自分が感染したかどうか確かめることをしようとしな。その結果、検査や治療が遅れて、病状を深刻化させたり、感染者を増やしてしまうという悪循環に陥ることになる。

性教育は、この悪循環を断ち切らなければならない。そのために何より大切なのは、感染することに「道徳」をからませないことである。「真面目な人はSTIにかからない」「感染したのは性道徳の低い人である」というような。感染と道徳は関係がない。感染したのはSTIの理解が足りなかった人、それ故に、予防に対し不注意だったからである。これは他の疾病についても同じことである。

また万一感染しても絶望と死が待っているわけではない。早く気づけばひとに広げることは防げるし、治療によって自らの人生も全うできる。こうして、二人で検査を受け予防することで安心して^{セックス}性に臨めるよう励ますが、望ましいことではないか。

これもまた性教育のパラダイム転換の一つと考えたい。

※Sexually(性)Transmitted(感染)Infection(症状)の頭文字。

掲載:2021年9月30日

次回は2021年10月31日に掲載予定です。

このゼミは「フレンテみえ」ホームページで公開しています。

フレンテみえ

検索

クリック

MIE PREFECTURE GENDER EQUALITY CENTER

三重県男女共同参画センター フレンテみえ

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田1234

TEL:059-233-1130 FAX:059-233-1135

E-mail:frente@center-mie.or.jp URL:https://www.center-mie.or.jp/frente/